

MEMO



# 馬と富士見町

## 富士見町歴史民俗資料館

〒399 - 0101

長野県諏訪郡富士見町境 7054

TEL:0266 - 65 - 3572

URL:<http://www.alles.or.jp/~fujimi/rekimin.html>

今と昔の富士見町の景観の違いとして馬の有無があります。もともと富士見町は豊かな原野に恵まれており、馬の放牧飼育や繁殖に最適の地でした。したがって、町内の農家は馬と共に暮らすという日常がありました。本年は<sup>うま</sup>午年ということもあり、切っても切れない馬との関係、そして当館が所蔵する馬具についてみてみましょう。

展示資料解説

馬の**装具**（鞍・はも・腹帯・胸がい・鞆・面懸・馬銜・手綱・口護・吠）

馬にはいろいろな装具を付けていましたが、もっとも重要な装具は**鞍**です。現在でも牧場などで見られる乗鞍は乗馬用の鞍ですが、町内で多く使われていたのは**荷鞍**（**駄鞍**・シト）と**運送鞍**でした。町内では多くの人がこれらの鞍のことをシトと呼び、この鞍を製作・修理する職人のことを「シトゆい」と呼んだそうです。彼らが作った新品の鞍をアラジトと呼び、使い始めは馬の背に形がなじむまで苦勞したそうです。また運送鞍は重いかじ棒を固定する頑丈な作りで、多くのものに飾りが付けられています。鞍を載せることを「シトを着せる」といったそうで、**腹帯**、**胸がい**、**鞆**で鞍を固定しました。代車などをけん引する際には、かじ棒を固定するために馬の首元には**はも**をあてがう必要がありました。

馬の顔に装着する**面懸**（たてご）と口に挟ませる**馬銜**は**手綱**で馬を操舵するのに必要な装具です。また、農作業時には**口護**を口にはめ、畑にある作物を食べないようにしていました。農作業時に馬が食べる飼料は**吠**と呼ばれる馬用の弁当箱に入れていました。中には煮た稗などを入れることが多かったようです。

馬の**蹄**（馬沓・蹄鉄）

馬の蹄は弱いため、**馬沓**をはかせて保護していました。馬はその重い体重に加えて重い荷物を背負っていたため、元来、弱い馬の蹄はすぐに傷んでしまったそうです。蹄に**蹄鉄**を付けるようになるのは品種改良された明治時代以降の馬からです。当時、蹄鉄を作ってはかせる**装蹄師**と呼ばれる資格を持った職人が町内にも数人が開業していました。現在でもこの装蹄師という資格は残っており、競馬界などで活躍する業種の一つとなっています。

また、冬寒い富士見では山坂の道が凍ってしまうこともあるため、スパイクのついた**氷上鉄**と呼ばれる蹄鉄も必須の装備であったそうです。

## 馬と農作業

農業を基盤とする富士見町にとって、農作業を行う上で馬はなくてはならない存在でした。多くの農家が水田を持っていましたが、稲作における重労働の一端を馬が担っており、特に田起こしと代掻では馬が活躍しました。

田起こし（耕耘）では犁を、代掻では馬に**馬鍬**や**代車**を曳かせるという重要な役割がありました。田起こしは、水を張る前の田んぼの土を掘り起こす作業で、明治時代以前はすべて人の手によって行われる重労働でしたが、明治中頃から馬が犁を曳いて田起こしをするようになりました。

代掻は、田起こしの後、田んぼに水を引き、田起こし後の土を粉砕して水田の保水力を高めるとともに、刈敷と呼ばれる若木（特にハンノキ）や草を肥料として田のなかに混入させる作業です。明治時代初頭に登場した馬鍬によって、馬による代掻きが行われるようになりましたが、刈敷に関しては人の足で踏みこまなければならず、大変な重労働でした。明治30年代に代車が登場してから、この一台で刈敷も田に踏み込むことができるようになりました。また、こうした馬鍬や代車などを馬に曳かせる作業には馬一頭に対して、道具を操る人と馬を引く人の二人が必要でしたが、三者の息が合っていないとうまく作業を行うことができませんでした。特に馬を引く人は重要で、馬の鼻先に2～3メートルの棒をつけて横並びに馬を引いていました。馬の正面に出ると、馬が蹴り上げた泥を全身にかぶってしまうため、気を使ったそうです。



代車を曳く馬（『富士見町史 下巻』より）

## 馬頭観音像

町内にはいくつかの馬頭観音と呼ばれる石造仏が祀られています。馬頭観音とは憤怒の形相をした観音で、人々の煩惱や災難、諸悪を祓う観音ですが、江戸時代以降は「馬頭」という名称から、馬をはじめとする動物供養や馬の無病息災、道中を往来する人々の安全を祈願する石造仏として建立されました。

町内に古くからある集落では、死んだ馬の功德を施すために、江戸時代には甲州系の瀬戸馬頭観音碑を建立して講を興し、明治時代に入ってから信州系の**富蔵山**観音を祀っていました。また、馬を飼育していた農家でも、馬の死後に馬頭観音を個人で祀る家もあったそうです。

## 馬の登場と富士見町

弥生時代の日本について書かれた魏志倭人伝には、牛や馬などがいないとの記載がある一方で、続く古墳時代には埴輪として馬形埴輪が多く作られることから、馬は古墳時代になってから日本にやってきたと考えられています。

富士見町の遺跡の多くは縄文時代の遺跡で、弥生～奈良時代の遺跡はほとんど存在していませんが、その後の平安時代の遺跡は多く見つかっています。10世紀に出された『延喜式』（大宝律令を補助するためのもの）にみられる御牧（朝廷が直接管理する官牧）が設置された年代と、富士見町に点在する平安時代の遺跡の出現期がほぼ一致していることなどから、この地域に官牧があった可能性が高いと考えられています。

## 富士見町の人々と馬

一昔前までは、富士見の人々にとって、馬は荷物を運ぶための交通手段であり、農耕の働き手であり、馬屋肥（肥料）の生産者であったことから、第一展示室の復元家屋の中に厩（馬屋）が設けられているように、家族の一員として同居していました。また、「馬は半身上」（馬しだいでその家の盛衰が決まる）といわれるほど大事にされていました。しかし、その馬を飼育するのは大変な重労働で、晩春から秋までは「秣刈り」といって、馬の餌となる干し草を毎朝刈りに出かけるのが男性の日課であったそうです。また、主に冬期間の馬の敷糞を兼ねた肥料作りのために、山林の手入れを兼ねて落ち葉を集めた「木葉掻き」も晩秋の重要な仕事のひとつとなっていました。

もともと町内では純国産種の馬を飼育することが多かったようですが、太平洋戦争中、陸軍の要請により軍馬向きの馬へと洋種混合が進められ、だんだんと大型馬へと変わっていききました。町内では本郷地域を中心に、販売を目的とした仔馬の生産が盛んで、明治19(1886)年から乙事区では馬市が毎年八月末に開かれており、馬喰（馬の買い付け業者）が全国から集まりって勢いよく競り落とすため、近隣の人々や露天商が集まり、たいへんにぎやかであったそうです。また、種馬は長野県の役所の所有であり、種付けは役所の責任で行われていました。現在の乙事公民館横にあった種付け所は、諏訪郡内では唯一であったことから、ここにも遠方から馬を引いてやってくる人々がいたそうです。また、神戸区には名馬が多く、よく働くものの、よく食べよく飲むことから、大食らいの人を“神戸馬のようだ”とからかったそうです。

## 馬が曳く道具（四ツ桶・犁・馬鍬・代車）

馬は特に農作物や肥料、農具など人間が運ぶには大変な労力を必要とする重いものを運んでくれました。家から畑へ下肥を四ツ桶で運ぶのは馬の重要な役割でしたし、犁や馬鍬、代車を引くのも重要な役割でした。

馬が農作業で使う道具を引くようになったのは明治時代以降で、もともとこれらの作業は人力で行われていたと考えられています。犁は田起こしや畑の畝立てを行うための農具です。改良犁（単さん双用犁）と呼ばれる犁には形がいろいろあり、考案した人の名前や地名などが付けられています。中でも立沢犁は富士見町立沢地区の植松峯太郎が考案した犁で、松山犁や上田犁と同様にレバーでヘラの向きを左右に振ることができました。改良犁が考案されたのは明治30年代ですが、長野県農会の奨励や講習会などがあり、諏訪地域では犁による農作業が大正期には普及したと考えられています。

馬鍬や代車（代掻車）は代掻き（耕土の粉碎や有機肥料の混入など）を行うための道具です。馬鍬を馬に引かせて作業を行いましたが、明治30年代になると代車が登場し、田んぼに散布した糞や若木などの有機肥料を代車に乗ったまま耕土に混入できるようになりました。

現在ではトラクターなどの耕運機でこれらの農作業を行っていますが、かつては馬が農作業の主役であったと言えるでしょう。



犁を曳く馬（『高原富士見 ふるさと語り草』より）

## 貴重な収入源－中馬稼ぎと馬市－

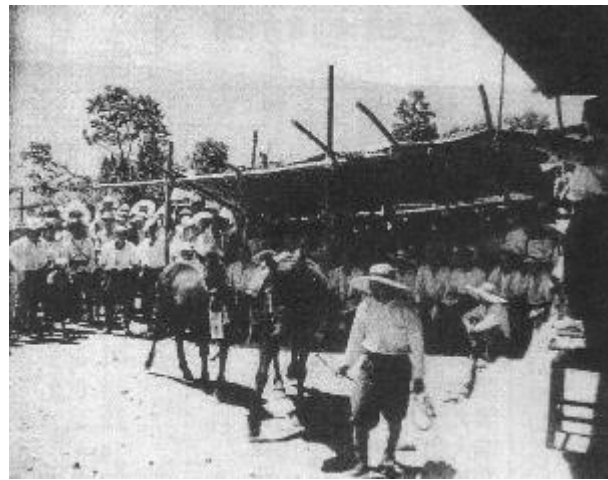
富士見町の人々の多くが農業で生計を立てていましたが、馬を使った輸送や馬の売買は、多くの農家にとっては貴重な収入源でもありました。

一般的に車が普及しておらず、鉄道も通っていなかった明治中頃までの物資運搬はその役割を馬が担っており、特に山や坂の多い場所での輸送は馬に限られていました。物資の輸送方法には、各宿場間の荷物をリレー形式で運ぶ「宿駅」と呼ばれる公的な運送と、農家が商品流通を商人から請け負う「中馬」と呼ばれる仕事がありましたが、特にこの中馬稼ぎは農家にとって貴重な収入源でした。特に甲州街道沿いの神戸区や上蔦木区では中馬稼ぎが盛んだったようで、中には農業での収入を超える家もあったようです。明治 37（1904）年になると富士見駅が開業しますが、鉄道開通後も駅からの貨物の移動はすべて馬車が主役でした。

昭和になるとトラックをまねて作った農業用運送馬車（通称：農車）が普及しました。これにより、農家の運搬作業は比較的楽になりましたが、自動車の普及によって姿を消しました。

一方、仔馬の生産が盛んだったのは乙事区・立沢区のほか、瀬沢新田・葛窪・小六・木の間などの区でした。江戸時代、この地を治めていた高島藩にとっても、馬は軍事上の観点のみならず特産品であったことから、頭数の掌握や統制を行っており、馬の売買や出生・死亡についても届け出書の提出を義務付けていました。また、自由な売買を制限しており、農民からは何度か規制緩和の訴状が提出されています。さらに、高島藩は馬の仲買人である馬喰の統制も行っており、馬喰から上納金を徴収して許可制にする代わりに、馬喰を介さない馬の売買を禁止し、馬喰が売買主から売買手数料を徴収することを認めていました。

地域の人々にとって馬の流通拡大を促し、高値で販売するためには多くの馬喰を集める必要がありました。この方策が馬市です。江戸時代の終わり頃には、とちの木区で馬市が開かれるようになりましたが、明治時代に廃絶し、代わって乙事区で開催されるようになりました。売買される馬の多くが「とうねっこ」と呼ばれる当歳馬（その年に生まれた0歳馬）で、当歳馬の生産を「とうねとり」と呼んだそうです。多い年には200頭近くの馬が売られました。戦争を機に、軍用馬の徴発などからだんだんと規模が縮小し、廃れてしまいました。



乙事馬市の風景（『富士見町史 下巻』より）

## 富士見の競馬

御射山社では古くから旧暦の7月に「御射山御狩り」という豊穰祈願の神事が盛大に行われており、神官達が狩りの神事を行うほか、近国の武士団が流鏑馬などの武芸を競う行事でもありました。江戸時代になるとこの地域を支配していた高島藩の武士が武技比べを行う行事になりましたが、明治時代になるとこの祭りは「原山様」と呼ばれる一般庶民も参加する行事になりました。明治 34（1901）年になると馬好きの地元有志が、武技比べの古事にならない、農耕馬による競馬会を開いて祭の盛況を図ろうとし、御射山祭から草競馬が発足しました。太平洋戦争が始まると、多くの農耕馬も軍馬として徴発され開催が不可能となり、昭和 17（1942）年に御射山祭での草競馬は途絶えてしまいました。

この草競馬を考案した競馬愛好家らは諏訪地方競馬会を発足させ、瀬沢新田区下原を競馬場に選定し、大正 12（1923）年から競馬会が開催されました。しかし、地方競馬に対する規制強化に加え、急造で整備不十分な会場であったため、大正 14（1925）年から現在の富士見区白樺団地（富士見町交番周辺）に競馬場がつけられました。この富士見競馬には全国から競馬専門の馬が集まり、毎年春と秋に本格的なレースが行われ人気を集めました。多い時には一回で約 90 頭あまりの馬が出走し、1 万人以上の入場者がありました。しかしながら競馬場の公認問題などからこの富士見競馬は昭和 7（1932）年に終わりを告げ、昭和 9（1934）年から上諏訪温泉競馬に移りました。

## 馬の衰退

一時期は町内に千頭以上いたとされる馬ですが、現在の富士見町で馬を見かけることはほとんどありません。農作業に欠かすことができない馬でしたが、戦時下の農耕馬徴発により馬に代わって牛の飼育が進みました。昭和 12 年になると、この地方の馬は当時の上諏訪競馬場（現市営グラウンド）へと集められ、老齢馬か妊娠馬でない限り 1 頭残らず軍馬として徴発されたと言われています。一旦は頭数も回復しますが、昭和 30 年代から農業の機械化が急速に進んだことなどもあり、町内に馬はほとんどいなくなりました。それまでの数百年続いた、富士見町の人々と馬との切っても切れない関係がわずか十数年で幕を閉じてしまいました。



愛馬出征記念碑（小六区）